



ふくえい

市川市立福栄小学校だより

令和3年10月25日発行 NO.12



—「あい」がいっぱい福栄小—

<https://ichikawa-school.ed.jp/fukuei-sho/>



が通い合う会話を 楽しめるように



後期が始まり1週間が経ちました。10月に入り緊急事態宣言が解除され、15日からは、学校生活も9月に教育委員会から発出されたガイドラインに沿って行われることとなりました。校舎内に、鍵盤ハーモニカの音が響き渡るのを聞いて、少しずつですが日常に戻ってきたことを感じ、うれしくなりました。しかし、今後、第6波が到来するという話もあり、油断は禁物です。マスク、手洗いをしっかりとする、換気に気をつけるなどの感染予防は引き続き行っていきます。ご家庭でもご協力をお願いいたします。

さて、ある本に、医師が「この頃の子どもは、病院に来ても問診ができない。」と書いてありました。自分の症状を言葉にしてきちんと話せない、満足な会話ができない子どもが多くなっているということでした。たとえば、学校でも、こんな子どもがたくさんいます。「先生、えんぴつ。」と突然言いに来ます。「えんぴつがどうしたの？（先生は、鉛筆ではないけれど・・・）」と聞き返すと「忘れた。」。「どうしたいの？」と聞くとやっと「貸してほしい。」・・・という具合です。「先生、鉛筆を忘れたので、貸してください。」という自分が困っていることが言えません。

自分の思いを伝えなくても先回りして大人がしてくれる、テレビやパソコンの画面が一方向的にしゃべってくれる、コロナ禍でなるべく会話を交わさないほうがいいなど、子どもを取り巻く環境が変わってきているのも事実です。しかし、子どもたちが自分の状況や考えを伝える言葉や技能を奪ってしまい、ひいては言葉のキャッチボールで思いを伝え合う楽しさを見失わせてしまったりしているのではなかと考えてしまいます。

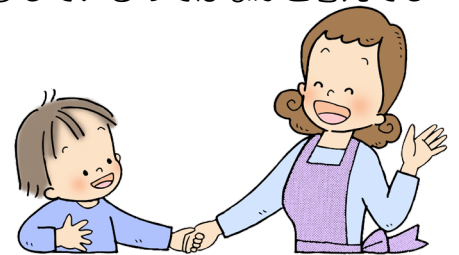
心が通い合う会話のきっかけづくりについて、次のようなことに気を付けてみるのはいかがでしょうか。

①子どもに「はい」という返事だけでなく、文を話させるような問いかけをすることです。たとえば、「今日は楽しかった？」と聞くと

「はい。」という返事で終わってしまいますが、「今日は何が楽しかった？」と聞くと「休み時間に、クラスのみんなでドッジボールをしてすごく楽しかったよ。」というような文で答えることになります。なるべく多くの言葉で語れるように尋ねてあげてください。

②しっかりと聴くということを心掛けることです。文字通り、耳と目+心で、相槌を打ちながら聞くようにすれば、心が通い合う会話につながります。

学校でも、教職員は、心が通い合う会話を通して、ひとりひとりの子どもたちの理解を進めていけるように心がけています。福栄小の教育目標「ゆたかに学び たくましく生き抜く子どもを育む—「あい」がいっぱい福栄小—」を目指して、後期も「学び『あい』・みとめ『あい』・きたえ『あい』」ながら、子どもたちが生き生きと生活できるように教職員一同、努力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



5年生 自然教室に行ってきました

9月から10月にかけての4週間で今年度2回目の「まなびの貯金箱」をおこないました。カードへの記入や子ども達への励ましなどのご協力をいただき、ありがとうございました。

6月の1回目と比較すると、4週間全てで、めあてを達成した児童数は微減しました(69.6%→68.3%)。しかし、担任からは、「読書の時間が増えた児童や予習・復習の習慣がついた児童が増えた。」との声も上がってきており、「家庭で机に向かう習慣をつけよう」というめあてに向けての成果は出てきていると考えています。これからも、家庭での学びの習慣付けをお願いいたします。「まなびの貯金箱」の3回目は、1月の予定です。

7月から延期になっていた5年生の自然教室がやっと実現できました。

行先は南房総、泊数は1泊となりましたが、自然教室の名の通り海あり山ありで、市川では味わえない自然満載の2日間となりました。

児童たちは発熱や体調不良者も出ず元気いっばいに活動でき、今後続いていくであろう宿泊学習のトップバッターとしての役目を、しっかりと果たしてくれました。



「まなびの貯金箱」
ありがとうございました



10月30日
読書発表会

10月30日(土)に読書発表会が行われます。コロナ感染症の感染者数は落ち着いてきましたが、配付してある文書の通り、児童1名につき2名の参観といたします。必ず学校から配付しました名札を付けてお越しください。ご協力お願いします。

教頭のつれづれなるままに...

「象と杭」

こんな話を聞いたことがあります。

サーカスの象は、まだ幼い頃、逃亡を防ぐために足に鎖を巻いて杭につながれます。象はまだ小さく力も弱いので、さほど大きな杭でなくても、引き抜くことはできません。それでも幼い象は、何度も何度も鎖を引っ張り、自分の動ける自由な範囲を広げようとするのですが、やがて、「自分の力ではこの杭を抜くことができない」と悟り、いつのまにか、無理に鎖を張らせることはなくなるということです。

さて、ここで問題です。

その象が大きく成長し、一人前の立派な象になったとき、杭の大きさはどうなっているのでしょうか？ 少し考えてみてください。

.....
答は、幼い頃と同じ大きさの杭でいいそうです。

体重も、筋力も、体の大きさも、子どもころのそれとは比べものにならないほど大きく強たくましくなっているというのに、象自身は「逃げることはできないんだ」と思い込んでいる、という話です。

さて、児童の皆さん。皆さんは今の生活や学習の中で、「自分にはできない」「頑張っても無理」などと、あきらめてしまっていることはありませんか？ 皆さんは今、成長の途上です。伸びしろがたくさんあります。昔はできなかったことに再度チャレンジしてみたら、今はラクラクとできてしまうかもしれない、あるいはもう少しでできそうな域まで達しているかもしれない。今の皆さんが、「できない」「無理」と決めつけることは、実は逃げでしかなく、楽をする言い訳でしかありません。皆さんの可能性は無限です。チャレンジしてみましよう。

皆さんは、象ではありません。

(この文章は、今の中二の代の卒業文集に掲載したものを今回書き改めたものです。)

